

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

勝池レポート      アジア資産運用アドバイザー      勝池和夫

「インドに回帰する世界経済の中心」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

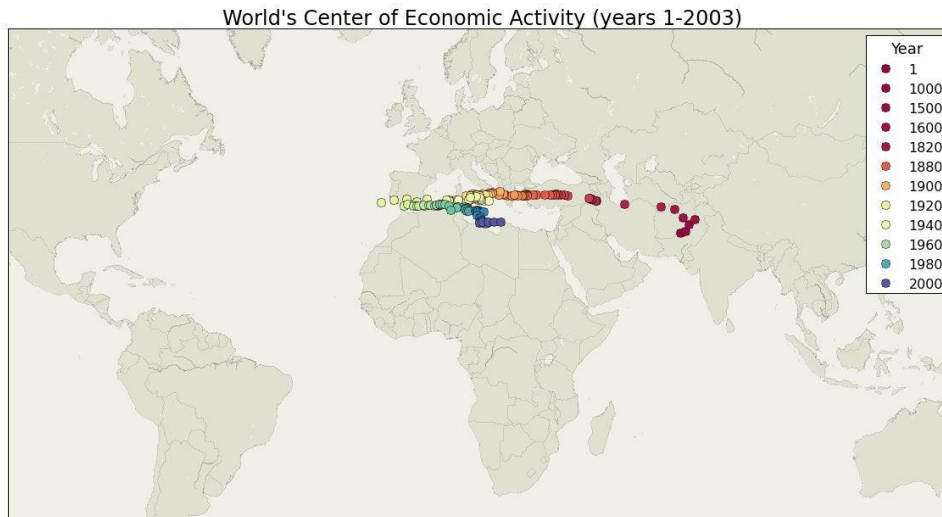
主に製造業の海外進出において、工場を中国に一局集中させるリスクを回避する経営戦略は、「チャイナ・プラスワン」と呼ばれてきました。近年では、新型コロナウイルスのパンデミックや地政学リスクの高まりを受け、この戦略に沿ったサプライチェーンの「脱中国依存」が鮮明になっています。中国は、人口が減少に転じたこともあり、もはや「世界の工場」でも「世紀の市場」でもなくなりつつあります。

これに擬えて、投資家が海外投資をアメリカ市場に一局集中させるリスクを避ける投資戦略が、「アメリカ・プラスワン」とこれからは呼ばれそうです。今度のカリフォルニア州のシリコンバレー銀行の経営破綻は、その戦略が強く意識されるきっかけです。アメリカも、「経済力」だけではなく、「文化力」「国際的影響力」などでも、世界をリードしてきた超大国としての足元が危うくなっています。

この二つの「プラスワン」の有力候補として大きな期待を背負った国が、インドです。

インドは、人口で既に中国を追い越したと見られることや、GDPでは2027年までにドイツと日本を上回り世界3位になると予想されることなどで、俄かに注目を浴びています。しかし、その勢いは、インドという新興国が台頭してきたと捉えるのではなく、世界経済の中心がインドに回帰していると理解することが、大変重要です。

世界の経済活動の中心は、もともと西暦1年から1800年頃まで、下の地図にあるように中国とインドに近い、インダス文明の発祥した地域にありました。その中心が西に移動し始めたのは1800年代からです。イギリスの産業革命を契機に隆盛を迎えたヨーロッパ経済に、生産性の向上で勃興するアメリカ経済が加わってからでした。ただ、その西への移動も長くは続かず、1900年代の中頃には大西洋上で東に逆戻りを開始します。



出所：ダニエル・ヴェルコヴ

アジアの力に引っ張られ、世界経済の中心は2015年にはイランまで戻り、現在更に東進を続けています。そして2050年までには、もともとのインダス文明に発祥地を通過し、地図のようにインドの北部にまで達すると見られています。その時のインドの経済規模は、中国とアメリカをも凌駕している可能性が十分にあります。



出所：ダニエル・カー

私たちの資産運用で、この世界経済のインドへの回帰の流れに乗ることは、極めてコアな投資戦略です。アメリカ株や全世界株のインデックス・ファンドの積立投資も一つの戦略ですが、先進国の経済が長い低迷期に入ると予想されるこれから、それらのインデックス・ファンドに一局集中させては、人生100年時代にはリターンが足りません。

あなたのインデックス・ファンドにも、大谷翔平選手のような頼もしいプラスワンが必要です。